

提携校間の夏期交換留学プログラムの意義と可能性

— 留学形態の多様化に向けて —

The Effectiveness and Possibility of A Summer Student-Exchange Program
Between Sister Schools

— For Various Types of Study Abroad —

田 崎 敦 子

Abstract

This paper examines the effectiveness of a summer student-exchange program between sister schools. Tokyo University of Agriculture and Technology (TUAT) has been running a summer student-exchange program with its sister school, Purdue University (Purdue) since 1992. This program has provided students with the motivation to pursue research in their major, and an opportunity to create good relationships between students at sister schools. This success is made possible by the establishment of an academic purpose for the program and the systematic support from the two schools.

Generally, summer study-abroad programs can provide students with opportunities to enjoy intercultural experiences in a foreign country without disturbing their regular course work. However, there is a danger that a short-term summer program without a specific purpose may give students little sense of achievement. We, therefore, have set an academic purpose, which is to broaden students' perspective on their major field of study, Agriculture, both academically and practically. This has established the program as part of academic activities. In addition, we offer many opportunities to the students at both universities to help each other in their respective countries and gain mutual understanding. Purdue students stay in Japan for six weeks during June and July, and then TUAT students leave for America and stay there for four weeks in August. The students host each other in turn. Also, during the stay, they expand their knowledge and experiences regarding their major through an internship or a farm stay.

Interviews with the students returning from the program show that they have learned new aspects of their major, and have been motivated to study further. Moreover, the students from both universities keep in touch with each other after the

program.

This program has proved to be meaningful both for the students' major study and the sister-school relationship.

1. はじめに

近年、日本の大学は海外の大学と積極的に姉妹校提携（以下、「提携」とする）を結び、その協定に基づく組織的な国際交流に力を入れている。これには教員の交流と学生の交流があるが、江淵（1997）は特にその学生交流に注目している。留学機会の増加に伴い、留学の動機、目的、形態が多様化している中、提携校間の留学交流は今後日本の大学における留学形態の主流となると述べている。この形の留学交流の特色は、まず第一に送り出しと受け入れを相互に行う対等な立場に基づいている点であるという。これは、従来（特に1950-60年代）支配的であった「発展途上国援助」の一環としての留学生交流計画における「受け入れ国」（先進国）対「送り出し国」（途上国）という二分法的関係とは異なるものである。第二に、提携先大学における履修単位の互換認定によって、学生が留学による空白期間を作らないように制度的に配慮する組織化された留学交流であることをあげている。この単位互換制度の実施のためには、大学教育の面ばかりでなく、大学の経営や管理運営面に関しても“国際的共通化”の作業が要求され、その相互調整が実務的な作業を伴う「大学の国際化」につながっていくと主張している。

確かにこのような大学の組織的な取り組みは、学生の留学を支援し、送り出し校と受け入れ校が対等な立場で行う留学交流を促進させることになるであろう。しかし、実際に江淵のいうような提携校間の留学交流を円滑に行うためには、教育面、制度面の整備にまだ時間を要する大学が多いのではないだろうか。また、単位互換を伴うような長期的な留学をする学生の数には限界がある。そこで、東京農工大学（以下、「農工大学」とする）では、通常の教育制度に影響を与えることなく実施可能で、より多くの学生が参加できる夏期交換留学プログラムを農学部の提携校であるインディアナ州立大学パデュー大学（以下、「パデュー大学」とする）と1992年から行っている。本論では、プログラムの教育効果、また大学の国際化に与える影響を考察することにより、留学の形態が多様化している現在、夏期交換留学プログラムがどのような意義、そして可能性を持つのか検討する。

2. 夏期交換留学プログラムの目的

夏期交換留学のような短期の海外留学は、明確な目的が示されていない場合、単なる“観光”として終わってしまう危険性があるため、大学が教育の一環として実施する場合には、大学独自の立場からその教育目的を設定する必要がある。

農工大学では、パデュー大学との夏期交換留学プログラムにおいて、農学部間の提携と

いう利点を生かし、「専門分野における実践的な経験を通じた国際的な視野の拡大」、「提携校間の学生交流の推進」という目的を設定している。

3. プログラムの概要

対象学生は、両大学の農学部学部生・大学院生で、例年の参加学生は農工大学から5～7名、パデュー大学から4～5名である。プログラムの日程は、パデュー大学の学生の日本滞在が6月半ばから6週間、農工大学の学生のアメリカ滞在が8月の初めから4週間となっている。この際、受け入れ大学のプログラム参加学生は、相手校からの学生が滞在中に生活上のサポート、研究に関する情報交換等を行う。

本プログラムは、語学修得を目的としていないためパデュー大学の学生に特に日本語能力を要求していない。また、滞在中に日本語コースが提供されることもない。日本でのコミュニケーションはすべて英語で行う。農工大学の学生に対しても、特別な英語能力は要求していないが、ほとんどの学生はこのプログラムを通して英語力を向上させたいという意欲を持っているため、パデュー大学の学生との共通言語を英語とすることに問題はない。

プログラム内容は、学生が滞在国内で専門分野を実践的に学ぶという目的にそって設定されている。農工大学の学生は、体験を通しアメリカの農業の現状を理解するために、約3週間農家にファームステイをし、農作業や地域の勉強会などに参加する。一方、パデュー大学の学生は、実社会で専門分野に関連する経験、知識を得るために企業や研究所で約5週間のインターンシップを行う。基本的にはホームステイをするが、インターンシップ先によっては研修所等に滞在する場合もある。これまでのインターンシップ先には、動物園、環境調査会社、製薬会社の研究所等がある。

ファームステイ、インターンシップ終了後には、受け入れ大学で約1週間のon-campus activitiesが用意されている。受け入れ校の学生は大学の研究室や実験施設等を公開し、研究の内容や方法を紹介する。特に、農工大学では、この期間に農学部の複数の教官による特別講義（英語のみ）を開講している。

4. ファームステイ・インターンシップの成果 —学生の報告から—

農工大学の学生の多くは、ファームステイを通し農学の新たな面を見出し、学習意欲を向上させている。学生の意見には、アメリカの農家と実際に農場で働きながら農業の面白さや難しさを体験し、農学に対する興味がさらに深まったというものが目立つ。また、アメリカで行われている大学主催の農家のため勉強会や、農家から大学への資料提供等は、今後日本でも積極的に取り入れるべきであるという経験に基づく意見も出ている。このような勉強会に参加し、農学に関する会話が進むにつれ、自分の知識不足を痛感したことが学習意欲の向上につながったという学生も多い。

また、本プログラムは英語学習を主目的としたものではないが、このようにアメリカ人と共に積極的に農作業に参加することによる、英語のコミュニケーション能力の向上、英語学習への動機付けの効果が報告されている。(田崎、1996)

一方、パデュー大学の学生は日本の企業や研究所でのインターンシップを通し、それぞれの研究分野の日本での進展状況が理解できたことを本プログラムの成果として高く評価している。同時に、日本の会社で働き、日本の家庭にホームステイをすることにより、日本社会の仕組み、家庭生活等の日本文化を体験を通して学んだことを貴重な経験としてあげている。この中には、来日前にメディアから得た日本文化に関する情報、知識は非常に片寄ったものであることがわかったというコメントもあった。例えば、渡日前は日本社会の厳しい上下関係や規則に抵抗を感じていたが、実際はそれが組織の円滑な運営を可能にしている面があることがわかった等、体験を通し日本文化を肯定的に見直す姿勢も見られた。

また、最後に大学のキャンパスで行ったon-campus activitiesは、短期間ながらも大学の雰囲気を経験することができたという点で両大学の学生に好評であった。この体験を通して、アメリカへの長期留学を真剣に考え始めた日本人学生も多く、これまでの本プログラム参加者38名中9名が実際にアメリカの大学・大学院へ留学している。その他、現在留学を検討している学生もいる。

このような学生の報告から、本プログラムの成果が専門分野における学習だけでなく、異文化理解学習、外国語学習、さらには長期留学への動機付けの機会にまで及んでいることがわかる。

5. 学生交流の推進

本プログラムには、提携校間の学生交流の推進という目的がある。学生の交流活動は、インターンシップやファームステイの間の週末や、キャンパスで過ごす期間を利用して行われる。

5-1. 活動内容

パデュー大学の学生を迎える農工大学の学生は次のような活動を行う。

(1) 出迎え

農工大学の学生は、成田空港へパデュー大学の学生を出迎え、その晩宿泊する学内の施設に案内する。そして、到着したばかりの学生のために夕食と翌日の朝食を準備する。

(2) 学校周辺の案内

到着した翌日、教官によるオリエンテーション終了後、農工大学の学生がキャンパスや学校周辺を案内する。その際に電話のかけ方やバス、電車の乗り方等日本で生活する上で

必要なことを教える。

(3) 歓迎会、送別会

農工大学の学生は、ホストファミリーを招待して大学が行う歓迎会、送別会に参加する。学生の交流活動に対してホストファミリーの理解を得るため、会では農工大学の学生もホストファミリーに紹介される。

このように到着時の不安な時期に受け入れ校の学生がサポートする機会をできるだけ多く作り、学生間の協力体制が強化されるよう配慮している。

(4) 日常生活のサポート

インターンシップ開始後は、週末を利用し買い物や東京近辺の案内等の日常生活のサポートを行い、交流を深めていく。

(5) 地域交流

ホストファミリーが日本人学生を自宅に招き、留学生と共にパーティーを開くという機会も増えている。普段ほとんど地域交流の機会を持たない日本人学生にとっては貴重な経験となる。

(6) 研究室紹介／特別講義

インターンシップ終了後に行われるon-campus activitiesの期間に、受け入れ校の学生は自分の研究室を公開し、研究活動の様子を紹介する。相手校の学生にとっても自分の専門分野の研究や資料は興味深いようで、熱心に説明を聞いている学生が多い。

農工大学で行われている英語の特別講義は、プログラムに参加していない学生にも公開されているため、より多くの学生と交流する場となっている。講義終了後には、学生が集まりディスカッションが行われている。

農工大学の学生が渡米後は、受け入れ校となるパデュー大学の学生が中心となり同様に上記のような活動が行われる。

5-2. 学生交流の成果

(1) 異文化理解教育の効果

井上(1997)によると、異文化理解教育で重要なことは、個人が自己と異質な文化的背景に「気づく」こと、また自分がそれまで慣れ親しんできた文化が、相手からみるといかに異質な文化に見えるかという相手の視野への「気づき」であるという。視野を広げ、自己の視点のみに固執しない開かれた態度を獲得するためには、相互の視界の違いを直に感じ取ることが必要であると述べている。

本プログラムで行われている学生交流を、このような異文化理解教育の視点から考えてみたい。農工大学の学生はパデュー大学の学生との交流を通して、アメリカ人が日本でど

のような点に困るのか、また便利だと感じるのか等を直接聞くことができる。つまり、アメリカ人の考え方、視点を学ぶと同時に、アメリカ人の目を通して自分の文化や社会を見直すことになるのである。このように自文化を他者の目を通して意識的に観察することは、「自文化中心主義」の考え方から学生を解放し、文化を相対的に見る目を養うことになる。同時に異文化に対する気づきを高めることにもつながるであろう。これは、井上のいう自文化、異文化に対する「気づき」を重視した異文化理解教育の一環と見なすことができる。

(2) 渡米前のオリエンテーションの役割

パデュー大学の学生から日米の生活習慣の相違を聞くことにより、農工大学の学生は逆に自分たちがアメリカで気をつけなければならないことがわかる。これは、日本人学生に対して渡米前のオリエンテーションの役割を果たしている。農工大学の学生にとっては、教官が行うオリエンテーションよりもパデュー大学の学生から直接得る情報の方がはるかに現実感がある。また、自分に必要な情報収集を英語で行うことで、彼らは自分の英語力に自信を持つことができるようである。インディアナ州の気候や、生活様式の違い、ホームステイで注意することなど、渡米前に必要な多くの情報はパデュー大学の学生から農工大学の学生へ直接伝えられている。

(4) 日本人学生の英語力の向上

パデュー大学の学生と英語でのコミュニケーションは、渡米前の英会話のレッスンとしての効果を上げている。日本人学生の使う英語は必ずしも文法的に正しいものではなく、単語の羅列という場合もあるが、英語でコミュニケーションを図ろうとする努力や理解しあえたときの自信、達成感は教室では得難いものであり、彼らの今後の英語学習においても大きな意味があると思われる。また、パデュー大学の学生に自分たちの国、大学、研究に関して英語で説明するということは、国際理解教育、異文化間教育の視点からみた英語教育において重視されている発信型コミュニケーション能力の育成につながっている（本名、1997）。

実際、学生から「英語でのコミュニケーションに自信がついた」、「親しくなったパデュー大学の友人といろいろな話をするためにもっと英語力をつけたい」という意見があり、学生交流が英語の運用力の向上、英語学習の動機付けになっていることがわかる。

(5) 相互援助体制の確立

パデュー大学の学生の日本滞在終了後、農工大学の学生が渡米し、今度はパデュー大学の学生が受け入れ側となりサポートすることになる。渡米先で友人が待っているということは、心強だけでなくアメリカを大変身近に感じさせるという学生の感想がある。また、プログラムに参加したパデュー大学の学生を通して他のアメリカ人学生と知り合う機会が増える等、農工大学の学生のアメリカでの交流はホストファミリーだけではなく止まらないようである。

(6) 学生のネットワークの拡大

プログラム終了後も、文通やE-mailを通じて両校の学生の交流が続くようになっている。また、農工大学の学生間の参加者ネットワークも広がりつつある。このように、プログラム参加をきっかけとして交流が継続することにより、学生のプログラム参加意識が高まり、参加経験者同士、また参加経験者と希望者間の情報交換も活発になっている。

プログラムを中心とした交流が広がるにつれ、農工大学の学生にとってパデュー大学が提携校として身近な存在になっていくようで、プログラム参加者の中からパデュー大学へ長期的に留学する学生も出ている。このような学生のネットワークは、今後プログラムの継続、発展に大きく貢献するものである。

6. プログラムの成果の背景

本プログラムが以上のような成果をあげることができた大きな理由として、次の3つの点が考えられる。

(1) プログラムの目的の明確化

本プログラムでは、学生の専門に基づいた教育目的を示し、それに合った内容を設定したことが多くの面で効果的に働いている。まず、目的を専門に関連させたことで、本プログラムが大学教育の一環として行われていることを学生に認識させることができた。目的を理解した学生は、プログラムの活動内容に意味付けができ、より積極的に活動に関わるようになるため、プログラム終了後に大きな達成感を得ることができるのである。

また、この専門に基づいた教育目的の設定が学生交流に与えた影響にも注目したい。両大学の学生の関心が専門に絞られていることで、漠然とお互いの文化を紹介するというよりは話題も見つけやすく、親密な関係が作りやすいことが学生の報告から明らかになっている。特に、日本人学生からは、英語の専門用語の方が日常生活の表現より豊富であることやお互い共通の知識があることから、専門に関する会話は英語でも理解しやすかったという感想がでている。

Hewstone (1996) によると、2つの異なるグループが関係を築くためには何らかのコンタクトが必要であるという（コンタクト仮説）。しかし、このコンタクトが否定的に働くと、逆に偏見やステレオタイプを強めてしまう危険性も孕んでいる（Allport、1954/1979）。本プログラムの場合には、“専門”という共通の関心事が効果的に働き、学生のコンタクトが活発になったことが有意義な異文化交流につながったのだと思われる。

(2) 組織化された留学交流

本プログラムは、個人の留学ではなく、提携を結んでいる二つの大学間で行われる組織化された留学交流であり、双方の大学の相互協力がなければ成立しないものである。学生のニーズに合ったプログラムを提供するために、内容設定、日程調整、ホストファミリー

の選択、事務的な手続き等に関して大学間の綿密な情報交換、打ち合わせが行われる。また、受け入れ校の教職員、地域住民の理解・協力もプログラム実現のためには不可欠である。このように両大学が組織的に動くことにより、充実した留学プログラムの実施が可能となり、その過程が大学の国際化への道となるのである。

(3) 短期間の相互交流

江淵(1991、1997)は、留学の大衆化が進み大量の留学生が入流する中で、留学生受け入れ理念モデルのひとつである「国際理解モデル」が質的に変化していると述べている。従来「国際理解」といっても、それは「留学生による受け入れ国理解」という“一方通行”的なものであったが、最近では“相互通行”的な学習過程としての異文化理解を重視する考え方が発展しているという。

本プログラムは短期間ではあるが、学生に相互交流の場を提供し、“相互通行的”な異文化理解の促進を実現している。まず、農工大学の学生がホストとしてゲストであるパデュー大学の学生と交流する。そして、約1ヶ月後には、農工大学の学生がゲストとしてホストであるパデュー大学の学生とアメリカ文化の中で交流することになる。ホストとしてよりはゲストの立場で異文化接触をする方が変容に必要な自文化検証の可能性が高く、不安が大きいと言われているが(黒木、1996)、本プログラムのように日米の学生が短期間にホスト、ゲストの両面から異文化接触を体験することで、より対等な立場で、相互援助、相互理解を確立する状況を作ることができたのである。

7. 提携校間の夏期交換留学プログラムの意義と可能性 —むすびにかえて—

これまで「留学」に関する研究では、長期的な留学に焦点が当てられる傾向が強く、1カ月という短期間の留学は研究対象としてあまり注目されてこなかった。しかし、学生にとって、長期的な留学に比べ日程的、経済的に負担の少ない夏期交換留学は、海外の生活をより身近に体験できる貴重な機会である。本学が行っている夏期交換留学プログラムは、短期間ではあるが教育目的を明確にすることにより、学生の専門分野の研究、英語学習への動機付け、異文化理解の促進等、多くの教育効果をあげている。また、プログラム参加者のネットワークの拡大等、本プログラムが長期的な学生交流のきっかけとなっていることもわかった。このような成果は、提携校の利点を生かした「教育目的の明確化」、「相互交流」、「組織的協力」の実現の結果得られたものである。

本プログラムをより効果的な教育プログラムにするためには、渡米前のオリエンテーションや、帰国後のケアの充実、さらなる学内外の協力強化、大学間のより綿密な情報交換等の多くの課題が残されている。また、大学のカリキュラムの一環として夏期交換留学プログラムを確立するためには、履修科目としての認定を検討する必要もあるだろう。今後は、このような課題を改善し、大学間協定に基づく組織的な国際交流として本留学プロ

グラムをより充実したものに発展させていきたいと考えている。

参考文献

- Allport, G. W. (1979). *The Nature of Prejudice*. Cambridge/Reading, MA: Addison-Wesley. (Original work published 1954)
- 江渕一公 (1997) 『大学国際化の研究』 玉川大学出版部
- 江渕一公 (1991) 「在日留学生と異文化間教育」 『異文化間教育 5』 アカデミア出版会、pp. 4-20.
- Hewstone, Miles (1996). Contact and Categorization: Social Psychological Interventions to Change Intergroup Relations. In C. N. Macrae, C. Strangor, and M. Hewstone (eds.) *Stereotypes & Stereotyping*. pp. 323-368. New York: The Guilford Press.
- 本名信行 (1997) 「外国語教育と異文化間教育」 江渕一公編 『異文化間教育研究入門』 玉川大学出版部、pp.101-115.
- 井上理 (1997) 「異文化理解教育の方法」 江渕一公編 『異文化間教育研究入門』 玉川大学出版部、pp.204-220.
- 黒木雅子 (1996) 『異文化論への招待』 朱鷺書房
- 田崎敦子 (1996) 「大学における夏期交換留学プログラムの成果と課題 - 言語と行動の相乗作用 -」 *The Language Teacher* 7、pp.21-23.